

西鶴の作品における当時慣習と 近世ヨーロッパの類似

ヤナ・ラシュトフコフ*

1. はじめに

季節変化に基づいている、一つの形態は、祝日や祭りである。すべての参加者に提供される祭りは、社会集団のもてなしの一形態である。そのため、祝日は社会的な絆の強化に寄与し、社会集団の連帯を反映している。伝承の起源が異なるのに、季節の変化や農作業の自然なリズムおよび宗教が主要な起源であるといわれている。節句は太陰暦や太陽暦と季節の循環によって決定される。現時、季節と節句の間のつながりは、暦の交換に消される可能性がある。例えば、祝日が太陰太陽暦から西暦への切り替えにより有意に変化させた。同様に、様々な宗教の伝統的な祝日が重ねて、接続された。そのため、ヨーロッパでの祝日と祭りは、キリスト教や他の宗教の伝承に基づいている。

伝統は文化、社会集団の知識および慣習を移転として理解されることが可能である。従って、伝統は、起源に基づくなら、家族慣習、社会慣習、民俗風習に分けることができる。

伝承は、大昔から魔法の力を起因している自然との村人の生活のつながりに基づいている。従って、キリスト教および他の宗教の残物に関連する祭りが欧州にも見られる。地域によって制限されている民俗風習でもある。

2. 西鶴とヨーロッパ

西鶴の作品で 町人の生活に関する行事が現れているが、現在までに残っているチェコの慣習は

農村文化に関係がある。その伝承の起源はおよそ16世紀に生まれいたが、近づいて見ると、西暦紀元前の時代に関する慣習もある。そのような慣習は、収穫期の循環と季節の移り変わりに関連がある。

井原西鶴のテキストは元禄時代の社会生活を反映している。主として、彼の町人物で祭りに結び付く慣習や重要な行事をよく把握することができる。西鶴は物語とともに、生々しい描写で小説の雰囲気醸し出している。繁華街の説明には毎年恒例の祝賀行事に必要な品物も含まれている。将来成功と繁栄を確保するための製品は、チェコでも儀式的適切な遵守のためにも必要でした。

西鶴が日常の生活を反映した。従って、彼の作品の中に個人や社会に関する詳細が現れている。彼の執筆が偽の哀愁なしであり、雰囲気を描いた詳細を見る目が素晴らしかった。西鶴は日常生活について書いたので、テキストにお礼や結婚式および葬式や祭りの絵が多い¹。もちろん、店や品物だけではなく、社会集団の活動がよく描かれる。巡礼者、高野山に巡礼、お盆の捧げ物が江戸時代の生活を説明している。西鶴の鮮やかな絵にすべての江戸の者が表れている。家庭内労働者、使用人、浮世の者、女郎、客に適切な挨拶、お世辞の描写が含まれている。

年の暮れには、約束、反射および精製の決済のための時間である。西鶴の作品では、例えば、その要素が短編小説の「世間胸算用」に表示される。西鶴は、正月に開催される活動でつながる短編集で、慣習を実装するための支出を詳細に列挙する。

* カレル大学 院生

そこでは、元禄時代に使用される物品の一覧が取得される。例えば、雛祭りの播鉢、お盆の太鼓、魔よけのお守り、蓬莢飾、伊勢エビ等が記載される。西鶴はユーモアで正しい装飾を取得する必要性に目を向ける。。

彼は家の掃除に関連付けられている準備の詳細を避けていない。そして、家族の中で新年のお祝いと小さな贈り物の重要性に言及することも忘れていない。祇園での習慣や礼拝など、新年に関連した他のお祝いの伝統も分かる。

チェコの伝統では、同じような儀式は、クリスマス休暇の準備中に表示される。キリスト教の伝統では、アドベントが新しい典礼年の初めである。この期間は、クリスマス日の4週間前を開始する。年が1月1日に開始するのではなく、最初のアドベントの日曜日に始まる。

チェコでは大掃除が聖ルチア（12月13日）のキリスト教の伝承に関連付けられている。伝説によると、聖ルチアが家を視察し、乱雑さに対する主婦を罰した。いくつかのクリスマスの伝承が非キリスト教の冬至に始まる。従って、主に、それは幸福の確保や邪悪から保護に重点的に取り組んでいる。それ故に、ヤドリギは、クリスマスの本質的な部分である。ヤドリギは、家族に幸運と祝福をもたらされ、落雷、火災や不幸のすべての種類に対する保護として使用される。クリスマスイブに、魚のうろこがテーブル掛けの下になければ、富が家に来ない。食物の九種類は、テーブルにあるべきである。九は、級数の最後番号であるため、完全性を象徴し、奇跡を起こす数です。クリスマスの意義は、相互尊重、愛と友情を中心に深く根差している。クリスマスは祝いの食卓で家族の集まりの時間である。

古代ローマに気ままな陽気で伴う最終日のお祝いは、後のキリスト教のヨーロッパに好かれなかった。何世紀にもわたって、ユリウス暦によると、暦年末には異なる国で異なる日付があった、例えば3月1日、3月25日、12月25日。そのた

め、お正月の伝統は16世紀に開始した。年頭は、16世紀にグレゴリオ暦が採用されたため、1日1月に統一された。その後、信者は祈りによって、古い年に別れを告げるようになった。

借りたものは、年末までに返されるべきであった。そうでなければ、来年に不幸をもたらさだろう。大晦日が、伝統的なクリスマスの祝日ではなかったが、元日は大切な日であった。新年に何も欠けないように、家から何も持ち出しはしなかった。新年に幸福が飛び出さないように、鶏肉も食べてはしなかった。西鶴が、債務者と新年の夕方までに債務を決済する習慣に多くの小説を捧げた（次の期日は7月14日であった）。物語に出てくる人物は負債を清算しようとしているが、借金を削除することはできない。大晦日の時に借款が供与されなかったので、貧乏な人は祝日を乗り越えるため、現金ですべての品物を払わなければならなかった。

使用人は、西鶴の作品で欠くことのできない役割を果たしている。江戸時代の雇用契約の更新期間と使用人に洋服を寄付する習慣が言及されている。同じ伝統がチェコにも表示される。聖ステューブンの日に雇用契約が更新された。使用人が年間契約の報酬を取得し、正月に仕事に戻った。その時に、彼達はナットやローズマリーやリボンで飾られる三本鎖で編んだ丸いケーキを受け取った。愚か者の祭りは、この日に元々も祝われた。その日は、クリスマスのお祝いの一部であった。仮装行列は、町を歩いて、示唆的詠唱を歌った。皆が踊ったり、食べたり、飲んだり、さいころを振ったりしていた。ロバに乗って司教は、行列の先頭でなければならなかった。しかし、キリスト教の教会は、中世の終わりに、乱暴さのために、愚か者の祭りを禁止した。今までのところ、その祭りはキャロルの形でのみ存在している。

しばしば小説に述べられる祭りはお盆（盂蘭盆會）である。死者の魂の返還の祭りは、西鶴時代で7月13日に祝われた。しかし、現在に、祭りは

八月期間に移った。西鶴は、灯火（折り掛け灯籠）を点灯し、経典を暗唱する習慣を展示する。また、伝統的な食品や製品を説明している。類似の饗宴は、11月中のヨーロッパの伝統で祝われている。チェコの伝統的な慣習は、墓地の訪問し、花や花輪を敷設することである。また、ろうそくをも生活の象徴として敷設し、死者のために祈りする。貧民は「魂」と呼ばれるケーキを与えられた。それは、ジャムやケシの種に満ちていた長方形のケーキであった。加えて、精神の日に雨が降った場合、死者の魂が自分の罪を嘆く、といわれる。

西鶴は、小説で巡礼に関連する市民の習慣をも説明している。従って、新年の歌や巡礼者への贈り物や僧侶と尼僧の衣類についての詳細も明らかになる。高野山のように、巡礼の場所にも宿泊施設が存在された。巡礼と民俗祭りはチェコの伝統で中世にさかのぼる。その季節の独立したの休日が巡礼の場所への旅行の結果として発生した。巡礼の祭りは、広い領域からの職人を満たすための機会になっていた。年に一度開催された毎年恒例のフェアは、中世と近世以来、珍しい商品を購入するための好機であった。

江戸時代の主な祝日は西鶴に言及されている五季節であった。頻繁に記録された祭りの中は、正月や雛祭および丹後祭りのみならず、菊節句と呼ばれる祭りも含まれた。全国で五節句は確定日付が公式的に決定されていた。チェコの季節の祭りは、多くの場合、特定の地域に限定されていた。チェコの伝統的な慣習は中世、近世に始まるが、そのパターンを見ると、時々紀元前時代の形跡が現れている。収穫祭及びヴィンテージは、農作業に合わせるが、他の行事、毎年恒例の市場、巡礼、豚殺しは季節に合わせない。謝肉祭や収穫祭のお祝いは、仕事だけでなく楽しみの時間となった。現在にも、その祭りの一部は、豚の屠殺である。豚の屠殺の際に家で豚肉、内臓が処理される。謝肉祭や収穫祭の時には隣人が贈り物を提供された。

春の再来の歓迎、イースターや魔女焼きはチェ

コの節句である。モラナと呼ばれる女神は、春の再来の祝いの時、自然の死去と再生の考えに基づく季節農業の儀式に関連している。行列は、柴や乾いた草から作られた人形を手で持ち運んでいる。人形が死の象徴として、川に捨てられ、あるいは火で焼かれる。火と水が浄化力を持つので、村から冬、死、病気、貧困と不幸を取り除くべきである。そのあと、行列が春の再来の象徴として、装飾された木を持って行進する。冬の終わりを象徴する慣習は、キリスト教の教会の非難にもかかわらず、保存された。

イースターは、チェコで最も重要な祝日の一つである。イースターに関連した伝承は、局所的に異なっている。また、イースターと春分の期間は近いので、おそらく民俗風習が異教的春分が始まっただろう。イースターも春の祭りですから、様々な色にも象徴がある。イースターは、春の祭りであるため、様々な色が象徴的な意味をも持っている。

春の時期には夏に挨拶や魔女焼きの祭りが行われる。夏の歓迎は、モラナの野運び出しと同じ意味を持っている。魔女焼きは次に来る夏の祝である。高い場所でたき火を燃やし、邪悪な力を追い払うべきであった。井戸の清掃や五月柱および王家の騎行は、キリスト教のペンテコステに関連する伝承がある。

3. 伝統と慣習

祭りは社会集団で、関係を維持するために行われる重要な社会的行為である。結果として、もてなしはいくつかの層で見ることができる（個別的な贈り物や個人的な支援、社会集団内で支援、親族や親類で支援等²⁾）。

贈答ともてなしは双対特性³⁾が有している。もてなしは寄贈者と受贈者の間に直接的な関係を築き、もてなしの行為が感謝に基礎となる。また、間接的な関係も含まれている。循環的間接な関係

が贈答交換の献身である(適切な価値を返すこと)。もてなしが、介護、忠誠心、威信、信頼性を見せている象徴的価値(資本)を含める。象徴的価値は、社会分野で人を分類する無形の資質の表現である。

もてなしの様式および贈答の伝統的慣習は幻想を維持することができる。幻想は、参加者が期待をせずに渡されていることである。それにもかかわらず、贈答交換しなければならないことは明らかである。もてなしは、贈答交換の枠組みとなる。交換される価値が、経済的(有形)、文化的(知識)、社会的、象徴的な価値を含める⁴。

結婚式や葬式などの人生を変えるような出来事は個人や家族の社会的地位を実証している。このような観点から、伝統的文化やもてなしは、社会集団内の位置を証明する要素である。贈答は、寄贈者と受贈者の間に存在している献身の確認している社会集団内のつながりとなる。有形贈答品、支援活動にかかわらず、贈答の文化概念は重要である。受贈者の位置が関係を強化するため重要ではない。横の関係は社会集団の対等な構成員の間であり、縦の関係が上下関係になる。

人にとって贈答の形態も重要な部分である。贈答の形態によって、関係が強くなれるし、個人と社会的階層の間に関係が強化される。従って、贈答は社会的集団の中で祭りの形態を取ることができる。

同様に、生活困窮者に与えられた慈善が贈答である。慈善は歴史的に生活困窮者に限定されなかったため、債務を持った者が含まれていた。債務者監獄は近世に欧州に共通した。その時に、投獄債務者が周囲の慈悲に完全に依存していた⁵。

贈り物は生活困窮者に寄付されているので、慈善が直接的な関係を包含される。しかし、慈善が社会集団の問題に解決させるので、間接的な関係をも包含される。

もてなしはいくつかの形態が徐々に弱体化し、現代社会に向け消えた。市場社会では贈答は使わ

ないが、市場が失敗したときに社会集団内の関係の重要性が現れる。従って、社会は以前の関係に戻るため、献身的概念の重要性や生活に対する連帯感が明確に示している。

年代記や歴史文学の記録が行事の組織を記述している。慣習が確立や維持することの重要性を示し、縦横の絆を表示している。歓迎の儀式、席、食事、贈り物は関係者の地位を示している。

もてなしに与えられた隆起が減少した。ただし、提供されるもてなしの形についてかなり明確な考えは中世と近世スヨーロッパに存在していた。もてなしは、隣人や見知らぬ人のすべての種類の豊富な娯楽である。それは、宿主の家で特に肉、飲み物、寝台を備えた親切な治療である。もてなしは、親者に限定されなかった、貧しい人々にも拡大した。寛大さを示すことは威信を示すことであつた。その寛大さが忠誠心や尊敬で返済し、寄贈者の位置や集団内の関係の安定性に寄与された。季節の祝い、結婚式、葬式の時に見知らぬ人へのもてなしは位置を示していた。部下、使用人、近所の人、困窮者等に与えられた寛大さも重要であつた。

ヨーロッパでは、重点は、特に宿主の義務に配置した。社会的位置にかかわらず、すべての顧客を歓迎し、食品や飲み物によって処理した⁶。また、主人は客に保護⁷を提供するために余儀なくされた。祭りは全員に与えられるので、集団関係の連帯感や付属を強化している。そして、祭りに関する喜びは象徴する感謝になる⁸。

後悔や加護に感謝を仰ぐことおよび奇跡の礼拝の主因により巡礼が行われた。巡礼はヨーロッパで社交中枢になってきた、社会的娯楽や買い物も関連された。その結果、社会関係に積極的な影響があつた。祭りの形態は変化していたので、負担の変遷が重かつた。客の数が多くなり、来る客の焦点を合わせる施設が必要となつた。社交行事はより親しい者に限られたので、身近な社会環境を中心に焦点を当てた。

贈答と「もてなし」は関係に直接的及び間接的な影響を持っている。しかし、隠されたリスクもある。否定的な反応や約束の負担が含まれる。しかし、贈答と「もてなし」は一普遍的な価値として、社会的関係を強化し、社会集団での個人の位置付ける。伝統的な習慣は年の間に様々な国によって異なる。行動形態は文化的、歴史的伝統にも基づいている。しかし、基本的な行動の原則と形態は、客と主人、寄贈者と受贈者との関係を基礎にしている。結果として、日本と欧州の文脈で同様の伝統を見つけることが可能である。社会集団取り組みは祭りの活動で見られている。最も一般的な例は、季節の変化や農作業に関連するお祭りは頻繁な民俗風習の一例である。

註

- ¹ Lane (1959)
- ² Krausman (2000)
- ³ Manolopoulos (2007)
- ⁴ Bourdieu (1990)
- ⁵ Gratzner (2008)
- ⁶ Heal (1984)
- ⁷ Krausman (2000)
- ⁸ Manolopoulos (2007)

参考文献

- Pierre Bourdieu (1990) 「The Logic of Practice」 Stanford University Press
- Karl Gratzner and Dieter Stiefel (2008) 「History of Insolvency and Bankruptcy from an International Perspective」 Söderströms högskola
- Felicity Heal (1984) 「The Idea of Hospitality in Early Modern England」 Past & Present 102
- 西鶴井原 (1975) 「日本古典文学全集 38: 井原西鶴集 I」小学館
- Saikaku Ihara (1963) 「The Life of an Amorous Woman and other writing」 New Directions Publishing
- Saikaku Ihara (1965) 「This Scheming World」 Charles E. Tuttle Company
- Ilana Krausman Ben-Amos (2000) 「Gifts and Favors: Informal Support in Early Modern England」 The Journal of Modern History 72 : 2
- Richard Lane (1959) 「Saikaku and Boccaccio: The Novella in Japan and Italy」 Monumenta Nipponica 15 : 1-2
- Mark Manolopoulos (2007) 「Gift Theory As Cultural Theory」 Culture and Religion: An Interdisciplinary Journal 18:1
- Alexandra Navrátilová (2004) 「Narození a smrt v české lidové kultuře」 Vyšehrad
- Alena Vondrušková, Kamila Skopová (2004) 「České zvyky a obyčeje」 Albatros